

道ひろくまゝのりて代の中政と安く銭も豫人

筆者

青蓮此為真法親王
大炊御門兼内大臣赤松
兼山内右衛門左衛門
石山系大納言基名

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

佐渡風土記板書

一 或書曰右大将家の御時王番に准へて西國より登る所中のけし
甲八赤一篝を焼く一篝の人負を按さるる五百人也此役を
勤るの國也此外にも近江伊勢若狭越前等の上の國を際りて
関東小國より此役を不動也右に役を登る人数合て或は四千
餘人と云右の例をいふより一を後に於て遠國より勤る者
ありて之後此地を今案するに王番の王の字大の字あり
後書之と云と雖も始より申大の字を用ひしかば事未だ澄ま
見ずしと人量し且又小西の氏士と云事ハ禁中より六位の

道じろとあつてしり代の中故とあつてせん旅人

筆下者

青蓮此為真法親王
大坂御門前内大臣家考
花山院大納言愛徳
石山寺大納言基名

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

大洲番役始

佐渡風土記板書

一 或書曰右大将家の御州王番に准へて西國より登る所中のけし
甲八赤一篝を焼く一篝の人負を按さるる五百人もいふ役を
勤むの國也以外にも近江伊勢若狭越前等より上の國を際りて
関東小國よりいふ役を不動也右に役を登る人数合て或は四千
餘人とす右の例といふより一を後に於て遠國より勤むる
ありて之後引地る今案するも王番の王の字大の字あり
後書之とて雖も始より申大の字を用ふれば事未だ澄か
見ずしと人量し且又小西の氏士と云ふ事、禁中より六位の

人といふの字は終る國をさす也を友京の氏族也或は佐後お藝
伊勢近江加賀お振るり上京ノ御番勤り一友京の人々
國名と一字宛友の字を加へて伊藤安藤とくさして依
今の世近も直よまると家名をう用る也

官位倍別授書

院の事 禁中の北面と貫々る人の云々よ院は何の何某
唯一人の名と云り餘りも浅同友傳事也禁中の院は侍の
宿也元院は五十九代より多帝の御始て源平重代の侍
武勇の達人と云拾人撰みて常々禁中より河津清涼殿
の東小東杏殿の西の院の戸と勤事と云是れ代々其人

と補せりて非常の事終る國の爲よ其人と撰るの事其代
傳名の侍多く是れ補す八十三代 土御門帝の御始て源平
八月の御りて國東の武士三浦昌心伊東宗任員後友尊西
そ外十三家と院の侍より事田舎人の知る東艦をも
いふ事か又一六位の侍を撰みて院に其人を補せりてその中
二人を上高とす一月の勤番と云院の事と云配は流例
よ依る必た右馬えを兼ふと有官の院と云り
是人皇八十三代土御門院の御始て源平四年八月の御有國東の
武士三浦昌心伊東宗任員後友尊西其外十三家の士を勤事
上京す則是大番の始り